



Title	アリストテレス『詩学』の研究
Author(s)	当津, 武彦
Citation	大阪大学, 1980, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/32543">https://hdl.handle.net/11094/32543</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">＜a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"&gt;https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed</a> >大阪大学の博士論文について <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">&lt;/a&gt;</a> をご参照ください。

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名・(本籍)	とう	ず	たけ	ひこ
	当	津	武	彦
学 位 の 種 類	文	学	博	士
学 位 記 番 号	第	4	8	3
		7	号	
学位授与の日付	昭 和 55 年 2 月 27 日			
学位授与の要件	学位規則第 5 条第 2 項該当			
学 位 論 文 題 目	アリストテレス『詩学』の研究			
論文審査委員	(主査)			
	教 授	石田	正	
	(副査)			
	教 授	高橋	昭二	教 授 山崎 正和

## 論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、西洋における文芸理論の最古典たるアリストテレスの『詩学』について、古典文献学の方法にもとづき、その成立事情、伝承、および構成の問題に論及し、文芸の基礎理論としての歴史的意義を、この書において用いられている主要概念の考察をつうじて確証するところに、主たる目的をおいている。

ルネサンス期以来、『詩学』の研究はすでに 500 年以上の歴史を閲したが、西欧各国においては近年尚各種の新研究が続出している現状に鑑み、本論文では、入手しうるかぎりの校本や研究文献を参照し、アリストテレスがこの書に託した意図を究明するとともに、永年の研究史をつうじて、「謎」とされた諸問題についてもまたその解明を試みた。

第 1 部では、『詩学』がアリストテレスのリュケイオン学頭時代に成立したとみる通説に対して、この書の含む構成上の不備や、彼の修業、遍歴時代にもすでに文芸に関する多くの類書の存在する事情から、長期にわたる準備によって成った私的草稿としてとらえる立場をとり(第 1 章)、次いで、著作の伝承に関するストラボン、プルタルコスの所伝、ならびにこれに対する近年の懐疑論の検討によって、『詩学』がアリストテレスの没後ルネサンス期にいたるまで暗黒時代を経過した背後の事情を推察し(第 2 章)、併せて今日伝存するアリストテレスの 3 種の作品目録に即して、現存『詩学』がそのうちのいずれの書目に該当するかを確証した(第 3 章)。また、『詩学』第 2 巻の存否をめぐる近來の論争については、アリストテレスの『政治学』、『弁論術』、および古人の引用にみられる『詩学』の表記に徴して、第 2 巻の实在性を保証し、その内容がカタルシス論と喜劇論を主旨とする結論を導出した(第 4 章)。その他、吾々に断片のみが残存し古人の引用によってのみ概要の知られるにすぎな

いアリストテレスの初期作品のうち、『詩人論』を採摘して、これと『詩学』との関連を、発展的関係において把握し、アリストテレスの文芸観の次第に熟成していく過程を論証し（第5章）、また今世紀にいたるまでの諸系統の写本の校合についての展望、および近年とみに活潑になった『詩学』の再構成論の論争点を明示することによって、この書の文献学的研究が微視的方法から次第に巨視的方法に転じつつある動向をあきらかにした（第6章）。

第2部では、『詩学』における文芸理論の攻究を主眼とし、まず『詩学』とプラトンの文芸観との比較を、真、道德、快、および詩的狂気の4点から試み、プラトンの哲学的、教育的見地からの文芸否定論に対して、アリストテレスによる文芸の自律性の確認と文芸への積極的な肯定論とを対照させ（第1章）、以下この基調に即して、『詩学』の主題たる悲劇論を中心に主要概念の検討に移り、悲劇の構成原理たるミュートス論（第2章）、悲劇の起因としてのハマルティアに関する教説（第3章）、悲劇構成の枢軸をなす逆転と発見の問題（第4章）、および性格描写についての規範となるべきエートス論（第5章）についてそれぞれ詳述した。就中、後代最も多くの議論を喚起したカタルシスの解釈に力点を傾け、ベルナイス以来の医療的カタルシス論が今日定説とされる実情にもかかわらず、今世紀に入って俄かに活潑となった定説批判を、構成論的カタルシス解釈の名の下に要約するとともに、定説からの超克を企図する近年のこの立場に筆者の共感を示し（第6章）、さらにカタルシス解釈に付帯する悲劇的感情の分析についても、近年の新解釈をつうじて係争点をあきらかにし、アリストテレスの真意を付度した（第7章）。尚、悲劇論と叙事詩論を主体とする『詩学』において喜劇論の欠落を惜む気持ちを禁じえないが、本論文では、10世紀の手稿として新たに発見された *Tractatus Coislinianus* の解説によって吾々に亡失されたアリストテレスの喜劇論の概要を類推する方法を講じた。

以上が本論文内容の要旨である。もちろん古典期ギリシアの範例的な文芸作品の分析によって、文芸創作の原理を提示しようとした『詩学』にもまた一種の歴史的制約の伴なわれていることは確かであろう。しかしそれにもかかわらず、現代に生きる吾々の文芸観にとっても多くの示唆に富む言及の内包されている点を見逃すことはできない。本論文執筆の根本的な動機もまたそこにあったといわなくてはならない。

## 論文の審査結果の要旨

『詩学』の研究が夥しい数に達している現状は、もとより西洋古典文献学の隆盛とこの書の古典文芸理論書としての重要性によることは言うまでもないが、他面において『詩学』が、その謎につつまれた歴史的由来およびその学術書としての構成上の不備の故に、その内包する諸問題を解明するための十分な条件を欠き、多様な解釈の可能性を残していることにもよる。その結果、論者も指摘するように、アリストテレスの全著作中でわずかに百分の一程度の比率を占めるにすぎぬこの小品が、過去数世紀にわたり対立するさまざまな解釈の相互批評の角逐の場となっているのである。論者は豊

富な文献に基づき、対立する諸説を慎重綿密に比較検討しつつ、それらの主張の錯綜した絡み合いの中から、『詩学』研究における問題の核心を明示し、また最も確実性を有すると思われる帰結を引き出しているが、この点に汗牛充棟の『詩学』研究状況の中で本論文のもつ独自の意義があると言える。例えば、論者は近年における『詩学』のテキストクリティークの傾向に従って、原テキストと付加挿入や傍注とを区別して、アリストテレスの基幹思想を問い、『詩学』再構成論のうちで最も重要と思われるゾルムセンとリンハルトの説を比較検討する。すなわち前者が補注とみなされている諸章のうちでも特に雑多な論旨の集合から成り立っていることを指摘している第18章を、後者は『詩学』の初稿ないしアリストテレスの基本的発想とみなすが、この解釈の根柢には、アリストテレスの原思想であった悲劇のエイデー（種類）論が『詩学』の成立過程の中で、ミュートスをば悲劇の生命とするメレー（構成要素）論へと変化したという考え方があり、これに従えば、『詩学』におけるカタルシス論の説明の欠如、初稿とみなされる各章における挿入的性格を有する部分の混入、『詩学』と『弁論術』における相互引用の矛盾など、『詩学』構成上の種々の問題点が解決されるのである。しかし論者は、リンハルトの独創的な解釈を評価しつつも、そのエイデー論が必ずしもメレー論ないしミュートス論と根本的に対立するものでないことを明らかにし、初稿と改稿を峻別する論拠に疑問を投げかけ、ある特定の観点から『詩学』の構成を検討する限り、その原テキストと考えられるものが減少していく危険を警告している。

またカタルシス句の解釈について、論者はその長い論争史の経過を克明に跡づけ、そこに内在する問題点を明快に剔抉している。すなわちレッシングにとっては、カタルシスとは悲劇が観客のうちに喚起する感情が極端にならぬように中庸の徳の確立に向って浄化することであるが、ベルナイスは、『政治学』における音楽のカタルシスの説明に準拠して、悲劇のカタルシスは哀みと怖れの感情を喚起して、観客にそれと同種の感情を吐瀉排出させ爽快感を与えると解釈する。これに対してミュートス構成論の立場に立つオッテは、その句中に含まれる語句の用例の徹底的な考察を通じて、カタルシス句に言うところの「そのようなパターマタのカタルシスを行なう」とは、悲劇の感情効果を示すものではなく、むしろ悲劇において取り扱われるべき出来事の純化を意味していると主張する。論者は構成論のカタルシス解釈を全面的に容認するにはなお慎重であるが、しかし『詩学』を道徳論や『政治学』からではなく、『詩学』自体から解釈するオッテ、エルスらの方法論に従い、カタルシスとは悲劇詩人の描与する肉親間の痛ましい行為、すなわち幸福から不幸への急転を、その酷薄非情から浄化せしめ、我々がともに人間として共感できる哀むべくも怖るべき事件として、これを描いていくための悲劇構成上の工夫を指す語と解し、カタルシスをミュートス論の一環として捉え、解釈の首尾一貫性を際立たせている。

さらに本論文において評価すべき点は、アリストテレスの『詩学』の成立の根柢にプラトンの文芸論に対する批判が伏在していると考えられる以上、『詩学』の研究にとってプラトンの文芸論との比較検討が不可欠であるとの見地から、『詩学』における記述の不備を補いつつ、両者の比較検討を綿密かつ徹底的に行ない、しかもその際、論者の明確な立場が貫かれていることである。例えば『詩学』第25章においてアリストテレスは、予想される文芸への非難とそれに対する弁護とを展開しているが、

これらの非難に対する論駁の基本的な観点が12あると指摘しながら、その内容を述べていない。論者は本文中よりその12の観点と思われるものを逐一選び出し、それらと、アリストテレスの予想した三つの一般的非難およびその五種類の分類、さらにプラトンの三点にまとめられた文芸批判とを図表化して対比し、それらの関係を丹念に検討することにより、プラトンの文芸批判に対するアリストテレスの論駁の根拠をなす文芸描写の普遍性ないし詩的真の意味を解明している。しかし論者は単に文芸における真偽および快の問題に関するプラトンとアリストテレスの見解の差異のみを強調する従来の通説を超えて、その差異の根柢にある共通の問題にも考察の目を向ける。すなわち文芸は感性的なもの（アイステートン）を通じて描写するほかはないのであるから、その普遍性に関しても、思考によって知性的なもの（ノエートン）を認識する哲学に及びえず、従ってアリストテレスの場合も、哲学に対する文芸の関係という点では、プラトンの場合と基本的態度が異なることを指摘し、古代の二大哲学者の芸術観における共通の側面への深い極めて独創的な洞察を示している。

また本論文に使用ないし引用されているギリシア語およびラテン語の語および文に関して審査の一部を担当された本学言語文化学部教授中山恒夫氏によれば、本論文は、形態論的、統語論的、造語論的に極めて正確である。

以上の如く本論文は、『詩学』の成立、伝承、作品目録や類書との関係、各種の『詩学』写本の校合および全体的構成、悲劇構成上の重要な諸概念等について、可能な限りの校本や研究文献の考察を通じて、『詩学』研究史上において論議の対象とされてきた諸問題を、包括的、多面的に、かつ詳細緻密に吟味検討し、極めて客観的な解明を試みるとともに、さらにそれを超えて、プラトンの文芸論との比較にみられるごとく、随所に独創的な洞察を加えている。

しかし、本論文の上述のごとき包括的な性格からみて、『詩学』が後代の文芸理論に及ぼした影響を明らかにする、いわゆる『詩学』後史への言及がなされていないことが惜まれる。また古代ギリシア悲劇のうちで『詩学』において取り上げられているものはその一部にすぎないので、論者が、『詩学』において論じられていない当時の悲劇についても『詩学』の理論が妥当するか否かを検討し、それによって古典文芸理論書としての『詩学』の規範的性格の吟味を行なったならば、本論文は一層その内容の充実度をましたであろうと思われる。しかしこれらのことは、もとより本論文の綿密精緻な文献学的研究の意義と業績を損うものではない。総合的にみて、本論文が学位請求論文として十分な資格を有することを認定する次第である。